桃より出でし者

temso

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桃より出でし者

【Nコード】

N7767A

【作者名】

temso

【あらすじ】

よくある、桃太郎のパロディです。気分転換に、ほぼ思いつきで書きました。暇つぶしに、ご飯のおかず、酒の肴に、よろしければどうぞ。

前

最近よく、家族について考える。家族とは、いったいなんなんだろう？

物心ついたとき、そばにいたのはじいさんとばあさんだけだった。近所の友達を見れば、その両の手を引くのはじいさんでもばあさんでもなく、もつと若いおじさんやおばさんだった。

「桃太郎や、ちよつとこつちおいで」

物思いにふけっていると、ばあさんから声がかかって、俺ははつとした。

桃太郎。そう、俺の名だ。この名前も、ふざけているとしか思えない。

一度、名の由来を尋ねたことがある。じいさんは笑って、こう言った。

「わしが柴刈りに行っているとき、ばあさんが川で大きな桃を拾った。それを真つ二つに断ち割ったら、中からお前が出てきたのだ」
ばかっている。素直に橋の下で拾った子だと言えはいいものを。

万が一、それが本当に名の由来だとしても、『桃太郎』はあまりにも安直ではないのか。

この名前のおかげで、学校でもよくいじめられた。

『こつちくんなよ、変な名前のくせに！』

『お前の名前、なんかエロいんだよ！』

『おい、こいつケツ太郎って呼ぼうぜ！』

それでも、育ててくれた恩義を忘れ、じいさんやばあさんに苦言を吐くことなど、俺には出来なかった。決して。

家に入ると、囲炉裏を囲んでじいさんとばあさんが座っていた。

じいさんは手にゴルフクラブを、ばあさんは何かのぎっしり詰まったビニール袋を持っている。

「ここに座りなさい」

なぜか二人の間の席を勧められた。すこし疑問を感じながらも、その不自然な位置に腰を下ろす。

「なんか用なの？学校ならちゃんと行ってるよ？」

「いや、そういうことじゃない」

じいさんは重々しく口を開いた。俺はちよつと警戒する。こういう話し方をするとき、それは大抵、なにか厄介なことが起こる前触れだ。

「実は、わしらは離婚することになった」

「ええ!？」

熟年離婚が問題になってるのは知っていたが、それが身近で起こると驚く。ばあさんも深くうなずいて続けた。

「本当はもつと前に決めてたことなんだけどね。あんたがいたからすぐにつて訳には行かなくて」

「俺のせいなの？」

「しかし、お前ももう立派な大人だ。わしらも気兼ねなく、新しいパートナーを見つけることが出来る」

「見つける気なのかよ……。っていうか、俺、まだ12なんだけど」

「何を言う。そんなに大きく育って、まだ自分は子供だというのか。そんな態度でいるから、せつかく就職しても長続きしない若者が増えるんだ」

「いや、そういうことじゃなくて……。まあ、たしかに」

実をいえば、俺の体はちよつとおかしい。

年齢は確かに12だ。それは間違いない。ちゃんと数えていたから。

おかしいのは、身長が175センチ、体重が63キロで、握力、背筋力、50メートル走、幅跳び、反復横跳び等々、どれをとっても一流のアスリートに引けをとらない身体能力の高さなのだ。

たったの12歳で。

「体は大人だろうけど……。ほら、法律とかあるしさ」
「だまれ。話を聞け」

じいさんは強引に遮って続けた。

「離婚するに当たって、財産が欲しいのだ」

臆面もなく言い放つ。ばあさんもうんうんとうなずいていた。

「桃太郎、鬼が島へ行け」

「へ？」

「鬼が島に行き、鬼どもから宝を奪い取って来い。根こそぎだ」

「な、冗談じゃない。何で俺が」

鬼が島。時折町に現れては民を襲い、財宝を奪い取っては帰っていく化け物どもの巣窟。

「あんた、正気なのか!？」

俺は声を荒げた。これはさすがに命に関わる。強く言わざるを得なかった。

「だまれ。育ててやった恩を忘れたか」

「くっ……。だいたいあんたら、年金もらってるじゃねえか!」

「あんなはした金で、生きていけると思っか!」

じいさんの趣味は競艇とパチスロだった。年金の一月分など、へたすれば一日で飛んでしまうことだろう。

「強盗なんかしたら、俺だって捕まるんだぞ!」

「そのへんは大丈夫だ」

じいさんは妙に強気に言う。

「帰ってきたら、警察への根回しの方法をレクチャーしてやる」

「……っっていうか、その前に俺が殺されるんだって……」

落ち込む俺の肩に、そっと手が置かれた。ばあさんだ。

「大丈夫よ、桃太郎」

「ばあさん……」

「分け前はちゃんと、3等分するから。それだけあれば一人で生きていけるでしょう?」

どっちみち放り出すつもりらしい。

天使のような微笑と共に、ばあさんはこつ付け加えた。

「行かないと、身包み剥いで放り出すわよ？」

そうと言われてしまえば、俺に拒否権はない。なにせまだ12歳、いくらからだが大入だとしても、一人では生きていけない。12歳では法律的にも雇ってもらえるはずはなく、自活するほどの経済力もない。

しぶしぶ承諾した俺に、じいさんとばあさんからそれぞれ一つずつ餞別が送られた。

じいさんからはボロボロの8番アイアン、ばあさんからはきびだんごの詰まったビニール袋。

「では、行け」

たったこれだけのものを渡されて、俺は家を追い出された。

夕暮れの街をとぼとぼと歩く。一人は寂しい。お腹もすいた。もらったきびだんごは特に味もなく、昼にもそもそ食べたらず早くも残り半分になってしまった。

畑仕事を手伝っている子供たち。夕日と共に作業を終え、家路につくその両脇には両親の姿。

涙がにじんできた。俺はいつたい、何をしているんだろう？何で俺は、こんなところを一人で歩いているんだろう？

涙でにじんだ視界の先、茜色に染まった道の行く手に、何かが見えた。

「…………？」

犬だった。イギリス出身のビーグル犬。尻尾を振り、舌をへっへつとだしてじつと俺を見つめている。

かわいい。

「…………よしよし、おいで」

しゃがみこんで手招きすると、犬は寄ってきた。頭をなでてやると、また涙が出てきた。

「よしよし……うつつ」

そんな俺の頬を、そいつが舐めてくれる。肌をなでる感触はこそばゆく、どこまでも暖かい。やさしい暖かさだ。

「うつつ……。お前も、一人ぼっちなの？」

そう言っつて首の下をかいてやると、手が何かに触れた。

「……………ん？」

よく見ると首輪をしていて、手が触れたところには金属のプレートが貼り付けてあった。

何かが書いてある。引っ張って読んでみた。

「……………相沢……………」

おそらく飼い主の名前と、住所がプリントしてあった。

「……………」

全然一人ぼっちじゃなさそうだ。

呆けていると、犬は鼻を俺の懐に押し付けてきた。

「なんだ？」

「わう、わう」

がさごそと音がして、ビニール袋が引っ張り出される。

「ああ、コラ」

大事な食料だ。さすがにおいそれとは渡せない。ましてや犬なんかに。

相沢は行儀よくお座りして、俺を見上げる。

……………やめてくれ。見るな。見るなよ。

「……………」

気がついたら、犬の鼻面にだんごを突きつけていた。

「ほーら、やるぞ」

「わんわん！」

鼻をくんくんさせ、一気に俺の手からきびだんごを奪い取る。一個ぐらいなら、きつと大丈夫なはずだ。

もしかしたら犬は団子を平らげた。

「どうだ？うまいか？んー」

頭をなでなでしながら、笑顔で語りかける。

「……マズ」

「!?!」

いきなりのレスポンスに、俺は心底驚いた。

「な、なな!?!」

「つていうか、よくこんなもん食えるな……。おめー、人間だろ?」

「い……。犬が、しゃべった」

相沢はあくびを一つして、俺を振り返る。

「じゃ、行くぞ。桃ヤロー」

世間の理をすべて裏切ったその犬は、俺を先導するかのようにつき始めた。

夜になった。そこは森の中で、どうしてこんなところを通らなければいけないのか、俺自身さっぱり分からなかった。ただ、相沢が言うのだ。いいから来い、と。

さすがに今日はもう寝よう、と相沢が言うので、俺たちは野宿をして夜を越すことにした。初夏の森、凍え死ぬことはないが蚊が多くて気が狂いそうになった。

「ねえ、相沢」

「なんだ?呼び捨てかよ。クソガキのくせに」

「う……。す、すみません」

「だいたいだ。てめえには気迫が足りない。どうせこれまで、流れに任せて無責任に生きてきたんだろ?」

「な……。そ、そんなの、知らないですよ」

「逃げんじゃねえよ。どうなんだ」

「……だつておれ、まだ12歳ですよ。大人に逆らったってどうにもならないじゃないですか」

「……ダメだな」

相沢は首を横に振った。

「いいか、よく聞け。確かにお前はまだガキなのかも知れねえ。だがな、お前の生き方を決めるのは年齢なのか？今の現状をどうにかしようとしなくて、この先のことがすべて何とかなるなんて思っ
てんのか？」

「……」

「自分の不幸をなにかのせいにするな。まずはあがいてみる。死ぬまであがき続けることが出来れば、お前は少なくとも不幸にはならない」

「……相沢さん」

何で俺は犬に諭されねばならないのだ。というか、いったい何の話をしているんだろう？

「……ふ。すこし熱くなっちゃったな。もう寝よう」

犬はその場に伏せ、俺も横になる。

「知ってるか？この森にはサルが出るんだ。団子を盗られねえよ
う、気をつけな」

「はい」

「じゃあ、おやすみ。ブラザー」

俺は目を閉じた。蚊が飛び回る音にもかかわらず、俺は涙を流した。人知れず、こっそりと。

帰りたい……。

その夜、相沢の言うとおりニホンザルが現れて、こっそりときびだんごを奪い取っていった。

俺は全く、それに気がつかなかった。

後

翌日目を覚ました俺は、懐に入っていたはずの食料がなくなっていることに気がついた。

「ああー！」

「どうした……？ふわ」

のんきにあくびをする相沢。偉そうな態度は相変わらず、その外見はとんでもなくかわいい。

「いや、その……。き、きびだんごが」

「なに!？」

きつとこちらを睨みつけるビーグル。

かわいい。

でもその後にくすさまじい攻撃は、そのかわいさを忘れさせて余りあるものだった。

「何してやがんだ、この愚図！」

全身ぼろぼろになった俺を踏みつけてうなる相沢。かわいくない、というか、こわい。

「す……すみません」

「謝るな！むかつくだけだ」

……なんで朝からこんな卑屈にならねばならないのだ。

しかたなく、俺たちは何も食べずに出発した。森の道はまだ続く。島に向かっていているんじゃないのかとか、そういうことは口に出せなかった。空腹の相沢はなんというか、甲子園で阪神が巨人に20対0で負けているときのライトスタンドみたいな空気をぶんぶん匂わせている。へたすれば生命の危機だ。

「……腹減ったな」

一時間ほど歩いた末、ちらりとこちらを振り向いて相沢が言う。

その目つきはなんとなく、獲物を狙う目のようにも見えた。

「そ、そうですね」

とりあえず同意しておく。

「あー、肉食いてえ」

目つきは変わらぬまま、相沢は再び歩き出した。

……こわい。

それからしばらくして、俺たちは休憩を取ることになった。時計は持っていないかったが、腹のすき加減と木々の合間から差す太陽光の加減でわかる。

もう昼だ。

相沢は変わらず機嫌が悪い。これで昼食もなしとなれば、本当に襲い掛かってくるかもしれない。鬼に食い殺される前に犬に食われる。それだけは避けたかった。

そこで、俺は先に手を打つことにした。

「相沢さん。おれ、昼飯探してきますから。そこで待っていてくだ

さい」

「あん？……ああ、いいだろう。頼んだぞ。肉にしる。肉だ、肉もってこい」

「に、肉ですね。分かりました」

「……あんまり遅くなるようなら、なんの肉だろうが文句はいわねえからな」

……こわい。

逃げるようにして俺はその場を去った。逃げるようにも何も、逃げるのだ。

木々の合間を走る。

出来る限りあの凶暴そうな犬から離れて、遠くへ行くのだ。そして落ち着いたら職を探そう。年をとってよぼよぼになるまで、穏やかに暮らせるような職を。

すこし開けた場所に出た。

そこは木が切り倒された跡らしい。切り株がいくつもあり、そこだけ日が差してなんだかきれいな風景を作り出していた。平和だ。

おもわずうつとりとした俺の目に、白い何かが映った。

「あれは……鶏か？」

いくつもの切り株のうち、一つの上に鶏が乗っかってくつろいでいるのだ。

ふと、相沢の言葉を思い出す。

『肉もってこい』

今なら、あの犬の機嫌が取れるかもしれない。鶏を眺めながら、俺はなんとなくそんなことを思う。

「いや」

頭を振って犬のことを振り払う。逃げるのだ。鶏なんかにかまっているヒマはない。

そんな俺に、突然後ろからかかる声。

「おお、いいじゃねーか。鶏肉か」

「!!」

おそろしい声音、したたるよだれ。相沢はゆっくりと姿を現し、少しずつのんきな鶏に接近していった。

「しゃああ！」

羽毛が飛び散る。牧歌的だが実は命に関わる悲鳴と共に、白が赤に染められていく。

陰惨な光景を、俺はただ見ているしかなかった。

昼食を終えた相沢と俺は、再び鬼が島へ向けて出発した。犬は満足げに尻尾を振り、その姿はかわいいものだったが口の周りには血がべつとりとまとわりつき、異臭を放っていた。

ちなみに俺は吐いた。

すでに俺の体力は限界だった。朝から何も食べていない、もう日が暮れようとしている。先ほどの壮絶な光景を思い出して食欲も湧

かないが、それでも空腹はやってくる。力は湧かない、それでも犬に急ぎ立てられて足を動かさねばならない。

このままでは死んでしまう。

そう思った瞬間、森の道にそれまでとは違った何かが見えた。

「お、もう近いな。鬼が島は」

もう何も考えられなかった。どこに島があるのかとか、そんなことはもうどうでもよかった。問題はそこに食べ物があるのか、安全があるのか。前者はともかくとして、後者は絶対には絶対と思っていた。

「ほ、本当ですか」

「ああ。……見えてきたぞ」

「?」

歩を進める。唐突に、森を抜けた。

「あれが鬼が島だ」

それはどう見ても日本の町並みだった。電柱が立ち並び、整備された道路が真っ直ぐに伸び、通りには人々が行き交い。すくなくとも凶暴な鬼が住む巣窟には見えない。

だがこの犬は、ここが鬼が島だという。これはいつたい、どういうことだろう。

たずねると、犬はこともなげにそばにあつた電柱を示してみせる。

「ほら、これだ」

『鬼が島二丁目』

「地名だったのかよ」

まあ、小島とか中島とか、島のつく名称はたくさんあるからして俺ははっとした。では、肝心の鬼と財宝は？

犬を見た。相沢は何も言わず、ただこちらを見上げていやらしく笑った。

「くく。桃太郎、いいか。お前確か、『鬼が島に強盗にいけ』って言われたんだらう? だったらその通りにすりゃいいのさ」

「いったい、どういう」

そのとき、視界がゆがんだ。立っている地平がかしぎ、重力が体とはでたらめに働く。

結論から言えば、俺は気を失って倒れた。

それから先の記憶は、ない。

「くくく。こりゃあ、都合のいいことだ」

『ニュースです。先日、鬼が島二丁目の鈴木太郎さんの自宅で強盗事件が起こりました』

画面が切り替わる。

『この事件で、住所不定無職の男が逮捕されました。容疑者は矢田桃太郎と名乗っていますが、調べによるとそのような名前の人物は戸籍になく、偽名を使っているとされています』

桃太郎の顔写真と、『(自称)矢田桃太郎容疑者』のテロップが入る。

『矢田容疑者は気を失って倒れた様子を装って鈴木さんの自宅に侵入し、連れていた犬を暴れさせてその隙に所持していたゴルフクラブを使って鈴木さん夫妻を脅して金品を奪い、逃走しました。逮捕されたとき持ち去った金品は所持しておらず、警察は矢田容疑者から話を聞くと共に金品の行方を捜しています』

目撃者のインタビューが挿入された。

『ええ、血まみれの犬が逃げていったんです。すごい悲鳴が聞こえて』

『こわいですよー。行き倒れを助けて強盗に遭うんですから。最低な手口だと思います』

アナウンサーに画面が戻る。

『では、次のニュースです』

後（後書き）

一応の終了です。なんでこんなオチになったのかじぶんでもよくわかりませんが。

目を通していただけたら、なんとなく嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7767a/>

桃より出でし者

2010年10月12日04時03分発行